

教育で気候変動と戦う：30年目の決断

木質バイオマスの高度利用を目指して、私自身が今の研究分野に飛び込んだのは、ちょうど30年前、農学部林産学科森林化学研究室で研究を始めた時である。きのこが地球上で唯一「木」を食べて生きている生物種であるということを知り、ちょうどバイオテクノロジーが盛り上がってきた時期だったので、木を溶かして様々な物質に変換できる「きのこの酵素」を使えるようになれば、今後の環境問題の解決に繋がるだろうと考えてのことだった。そんな研究者としてはまだ駆け出しだった私が書いた卒業論文の緒言に、一連の研究において大前提となる「CO₂の増加による地球温暖化や、人口爆発による食糧危機等」という言葉が出てくる。30年経った今でも同じことを言っていることには一貫性を感じるものの、地球の状況はあの頃から改善されているどころか悪化の一途を辿っていることを考えると、ふがいなさに穴があったら入りたくなる。(本稿の執筆は5月であるが)今夏もきっと起こっているであろう豪雨や猛暑で、農業関連の被害額だけで毎年数千億円規模に達していることに対して、日本国民は30年前から変わらず頓着せずに暮らしているようだが、そんな平和もいつまで続くものだろうかと憂いは尽きない。

20年前に教鞭をとり始めた頃からずっと地球温暖化の話を若者(学生)にしているが、気候危機の話をするると必ずアンチ温暖化的な質問が来るのも毎年のことである。その時は必ず「もちろん私は温暖化は人類が起こしたと考えているが、百歩譲ってこれまでの温暖化の原因が人間が排出したCO₂等の温室効果ガスではないとして、地球の温度が上がっているという現実、CO₂やメタンが温室効果ガスであるという現実を考えた時、これからも今までと同じように温室効果ガスを放出することは良いことか悪いことか」と質問する。すると全ての学生が「減らせるものなら減らした方が良いと思う」と答える。「だったら、私たちが向かうべき方向は一緒だよ」と言うと(不満そうではあるが)納得をしてくれる。話しは非常に簡単で、アンチ温暖化を唱えている人達はただ議論がしたいだけで、次の社会を作る若者にとってやるべきことは変わらないとい

うことに気づいて欲しいのである。

そのような私の研究分野は、昨今「バイオエコノミー」という概念に包含されるようになってきている。日本語で言い換えると「生物圏に優しい(負荷をかけない)経済活動」となるが、ヨーロッパ連合(EU)で取り組まれている三大柱は、「食糧の安定生産」(農業)、「化石資源からバイオマスへの移行」(主に林業)、「海洋の潜在能力開放」(水産業)となっており、農林水産という字面からみても、どこが責任を持てば良いかはすぐに分かることであろう。さらに、そのようなコンセプトで前に進めてみると、循環型社会(サーキュラーエコノミー)の構築は必須であることから、すでに欧米では「サーキュラーバイオエコノミー」という感じで両者は融合されているし、しかも最近では、生物多様性の確保を意味する「ネイチャーポジティブ」や、ヒトの心身と社会的な健康を意味する「ウェルビーイング」との関係性で論じられることも多くなってきている。すなわち、地球というプラットフォームの上で、自然と人間はバランス良く共存し、しかもそこに生きる人達の幸福度を上げる努力をするというのが、地球における人類の究極の生き方と言えるものなのである。

5年前に環境先進国のフィンランドで教鞭をとる機会を頂いたのだが、やはり環境後進国の日本でも若者の教育にはベストを尽くしたいという思いから、「One Earth Guardians(地球医)」を育成するためのプログラムを始動した。一昨年度までは、農学部内だけのプログラムであったが、昨年度から全学の学生に対しても門戸を開き、さらに昨年度は「Good Life on Earth」という高校生、高専生、大学の学部前期対象のプログラムもスタートさせた。研究や大学のアドミニストレーションだけでも忙しいのに、なんでそんなことまでと尋ねてくる同僚もいるのだが、これは既存の教育システムや入試システムでは、今地球が直面している課題に取組み、解決することが難しくなっていることを私なりに表現するためである。未来を担う若者にこそ、現実を知って、自分たちの進むべき道を自分たちで決めて欲しい、30年間温暖化に立ち向かってきた私の出した答えを読者の皆さんはどう思われるだろうか。

(東京大学 大学院農学生命科学研究科 教授 五十嵐圭日子・いがらし きよひこ)